建築の贈り物 ぐるぐるつくる

志岐 祐一

建物は建てた後が大事なんて、今更言われなくてもよくご存知ですよね。

でも大抵の場合、建てたあとのメンテナンスは、限り無く最低限。必要に応じて行う増築は、「用」はともかく「美」はちょっということも多く、雨漏りしたときはすぐに呼ばれるのに、増築の時にはなかなか声がかからないと、設計者のぼやきも聞こえてきそう。

ささやかですが3年ほどまえからある取り組みに参加しています。

そのプロジェクトは「ぐるぐるつくる大学セミナーハウス」。今回はその活動を通して受け取った贈り物のお話。

「大学セミナーハウス」といって、八王子の多摩丘陵の中に建つ今回の建物を思い出す方はどれぐらいいらっしゃるだろうか。「大学セミナーハウス」ができたのは、高度成長期真っ只中の1965年。大学への進学率が高まり、すっかり大衆化した大学では、大教室でマイクをつかって一方的に講義をする光景がみられた。そんなマスプロ教育への問題提起から誕生したのが「大学セミナーハウス」である。いまではすっかり一般化している「セミナーハウス」という名称も、創始者飯田宗一郎の造語であるという。

そんな「人の交流の場をつくる」という理念を形にしたのが、建築家吉阪隆正とU研究室のメンバー。訪れると最初に目にする本館は、これまで見たことの無い大地に楔を打ち込んだような逆ピラミッド。ユニットハウスとよぶ小さな3人用宿泊ユニット群を7つ、もとの地形に沿って集落のように配置。それぞれのユニットハウスから出てきた学生は、おしゃべりをしながら少し離れた講堂や図書館、谷状の地形を生かした野外ステージへ。風呂やトイレも別棟で、移動するときにほかの大学の学生とも出会い、たまに独りにもなる、そんな仕掛けがあちこちにちりばめられていた。多くの大学が会員になって、多くの学生が集った。その後20年かけて、自然環境と地形を生かして新しい施設が作られていった。利用者の手による記念植樹もたくさん行われ、オープン当初の禿山は、いつしか豊かな緑に包まれていった。

誕生から40年近くたった数年前、事件は起こった。

約20年ぶりにトイレやお風呂を建物の中に備えた新しい宿泊施設がつくられた。もちろん冷暖房完備。その代わりに、7つあった宿泊ユニット群の大半は壊されてしまった。重機が山肌を引っかき、引き倒すようにして。確かに時代はより豊かになって、トイレにしてもお風呂にしても快適性は格段にあがった。森の中とはいえ、夏には冷房もほしい。なんといっても、本館5階の食堂から眺める風景は、緑豊かな多摩丘陵から21世紀の暮らしが営まれる多摩ニュータウンのマンション群にかわった。それぞれの大学が自前でセミナーハウスを持つようになったことも大きい。

■40年以上も変わらない、大地に楔を打ち込んだような本館

■みんなで再生した野外ステージのベンチで一休み

Profile

志岐 祐一（建築家／日東設計事務所）
1966年鹿児島県生まれ。東京都立大学卒業。
同潤会アパートなどの調査や再現展示をおこなう。展示デザインをおこなった「日本の建築博物館」展が江戸東京たてもの園で開催中
関東学院大学、前橋工科大学非常勤講師

利用者の低迷に悩んだ末の決断とはいえ、建築関係者には衝撃が走った。日本を代表する近代建築としてDOCOMOMO20選にもなっていたのに。でも現地に行くと鉄製の手摺のペンキははがれ、さびが目立つ。野外ステージの客席用ベンチはすっかり朽ちてコンクリートブロックの足だけが残る。わずかに残ったユニットハウスも、かび臭く、傷みも目立つ。おまけにユニットハウスの解体によって、敷地をめぐることができた道がすっかり分断されていた。これでは、いまどきの女子大生でなくとも敬遠するのも無理は無い。

そこで、U研究室でセミナーハウスの設計に関わっていた建築家の斉藤祐子らが中心になって、ワークキャンプ「ぐるぐるつくる大学セミナーハウス」が企画された。

ちょっとしたことでも建築の印象は変わるものである。人の手が加わると、ほんの少しのことでも死にかけていたような建築がよみがえって見える。手摺のペンキを塗りなおし、ウッドデッキの端材を格安で譲り受け野外ステージのベンチを復活。歩きやすい道ってなんだろうとみんなで考えながら、ルートをきめて道を築きブロックで階段をつくる。そこに竹林から竹を切ってきて、手摺をつける。道の途中の見晴らしのよいところには煉瓦を積んでバーベキューコンロをセット。早速、使用試験とばかりに鳥の丸焼きや、燻製やら。もちろんゲストを招いての夜の建築談義のおつまみにもなっている。

そんなワークキャンプが春と秋、3年続いて今年の9月で6回目を数えた。毎回、学生を中心に延べ30名ほどが参加している。なんといってもセミナーハウス側の理解と協力は大きく、資材の支給のみならず、しばらくするといつの間にかワークキャンプで作った道の先が少しだけできていて、ちょっとうれしい。またセミナーを利用したある建築系大学は、版築技術でベンチを作った。みんながどんどん手をかけていく。そう記念植樹のように。入学記念○○の道とか、卒業10周年記念ペンキ塗りとか、手がけたものが新しい環境をつくる。そんな連鎖が続いてどんどんどんどん、ぐるぐるつくる。

机の上の課題に飽きた学生だけでなく、ゲスト参加のスマートな若手建築家も、売り出し中の建築史家も、日常業務から逃避したい社会人も、シャベルをふるって土を削り、刷毛をもってペンキを塗り、竹を割って柵をつくる。片思いの保存運動より、両思いの再生作業のなんとすがすがしいことか。精神的安らぎすら覚える。そうか、これが今回の贈り物。

■削られた大地に、土留めのブロックを築く

■職人さんの指導を受けながら、バーベキューコンロの煉瓦を積む

（撮影：志岐祐一）